The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<Book Review>John W. Creswell, "Qualitative Inquiry and Research Design: Choosing Among Five Approaches.", SAGE, 2013
Author(s)	寺口, 季
Citation	年報人間科学. 2017, 38, p. 225-230
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60462
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈書評〉

John W. Creswell

Qualitative Inquiry and Research Design: Choosing Among Five Approaches

SAGE, 2013

寺口 季

問題意識と本書の意義

今日、社会福祉を対象とする研究領域において、研究方法の検討は大きな課題と言える。ソーシャル・ワーク研究に代表的であるように、課題解決型の実践的な性格が強い社会福祉研究では、個別性が高く、多様で主観的な意味世界をいかに理論化していくかという点に焦点が当てられる。理論や仮説を構成する方法として、質的研究の意義は論じられているが、その方法論は曖昧で、事例報告に留まっている研究も少なくない。社会福祉研究における議論では、質的研究方法論が「いかなる対象や課題に対して有効なのか」という問いに対する答えは十分に深められていないという指摘もある（衣笠 2003）。社会福祉研究において、またさらにその枠組みを越えて、質的研究方法に対するさらなる議論が求められている。

本稿で取り上げるのは、*"Qualitative Inquiry and Research Design: Choosing Among Five Approaches"* の第3版である。初版は1998年、第2版は2007年に出版されているが、第3版は、時代に合わせた新たな議論を取り入れることはもちろん、研究倫理に関する項目に対してより綿密に議論が展開され、単なる手順書以上により深い学びがある1冊となっている。質的調査研究の様々な手法のうち、ナラティブ、現象学、グラウンデッド・セオリー、エスノグラフィー、ケーススタディの5つの主要な研究方法を取り上げ、それぞれの共通点や相違点の比較を通じて考察している。著者本人が冒頭で述べるように、研究方法に関する他の文献と異なる点は、この5つの研究方法を切り離すことなく複合的な視点を持っていることである。多くの質的調査研究に関する文献は、1つの研究方法に焦点を当て、いかにその方法が意義のあるものかを示すものである。しかし、学生や初学者は自分の問題関心や研究対象に合った方法の選択に迷いを覚えることがあり、評者もその例外ではない。具体的な論文例を示して、各研究方法の意義と同時に射程範囲と限界を提示する本書の多角的な視点は、そのような多くの研究者にとって役に立つだろう。そして、社会福祉研究が研究方法に関して直面する課題に、新たな視座を提供するのではないだろうか。

著者の紹介および本書の概要

本書の著者John W. Creswell は、ネブラスカ大学リンカーン校において1978年より教鞭をとっている。専門は教育心理学である一方、社会科学、人文科学を含めた幅広い学問領域における調査研究方法に強い関心を示しており、特に混合研究法（mixed method）、質的研究の方法論、および一般的な研究デザ

インに関して、数多くの論文や著書がある。邦訳では、*"Research Design : Qualitative, Quantitative, and Mixed Methods Approaches"* (2002) (＝2007, 操・森岡訳『研究デザイン－質的・量的・そしてミックス法』) や、*"Designing and Conducting mixed methods research"* (2006)

(＝2010, 大谷訳『人間科学のための混合研究法－質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン』) 等が挙げられる。

本書の特徴は、以下の3点である。(1) 複数の研究方法を比較し、共通点と相違点を分析していること、(2) 各研究方法の基礎となる説明に加えて、実際に各研究方法を用いた論文例を掲載し、解説を加えていること、(3) 1つの論文を異なる研究方法で再分析する試みを行なっていること。つまり、著者は本書を通じて、研究者が求めるリサーチ・クエスチョンに対する答えは、適切な研究方法の選択と深く結びついていることを、実証的に提示している。本書は研究デザインからデータ収集、分析にいたるまでを統括しているが、本稿では、複数の研究方法から自身の研究にとって最適な方法を「選択する」上での実用性に焦点を当てる。また、第3版の新たな要素を紹介しながら各章の概要を簡潔に述べた上で、社会福祉研究に対する本書の貢献を考察する。

本書の構成

研究デザイン

導入に続く第2章、第3章は研究デザインに関する視点を示している。第3版では、調査全体を通じて研究者の理念や立ち位置が重要であることをさらに強調するために、第2版からの改定が加えられ、研究デザインに取りかかるにあたって前提となる、研究者の哲学的な前提や解釈枠組みを扱っている。

第2章「哲学的前提と解釈枠組み」では、哲学的前提は調査の過程における問いの形成や結論の構成を明示するために重要であることを述べ、存在論・認識論・価値論・方法論の4つを提示し、その特徴をまとめている。一方、実際に研究に取りかかる際、前提となる哲学は解釈枠組みに埋め込まれる形になる。これは、研究者の立ち位置を示すものであり、本書では、社会構成主義、ポストモダン主義等7つの枠組みが挙げられている。第3章「質的調査のデザイン」は、より具体的な質的調査の共通する特徴および、研究デザインの手順が提示される。また、先行研究における多様な質的調査の定義をまとめた上で、著者の定義が述べられている。著者の定義は、方法論者としての性格が強く、研究者の立ち位置となる哲学や解釈枠組みから浮かび上がる問いの構築、対象者の声や研究者の反省によって再構成されていく“研究の過程”を強調している。

調査法の選択

第4章・第5章は、研究方法の比較検討であり、本書の核となる部分である。本章の特徴は、俯瞰的な立場で比較することによって、それぞれの特徴や意義を具体的な論文例を示して明確化している点である。著者は第5章冒頭で、以下のように述べる。「私が常々感じているのは、質的調査研究の執筆の仕方を学ぶ最良の方法は、その研究方法が用いられているたくさんの学術論文を読み、どのように構成されている

かを詳細にみることである。」(p.111) しかし、どの文献が参与に値するかを判断し、適切にその構成を分析することは、初学者にとって容易ではない。本書では、1つの論文例に解説が加えられている他、章末に各研究方法を用いた論文が複数紹介されている点も、実用的であると言えるだろう。

第4章「5つの質的調査アプローチ」では、各研究方法について、「定義と背景」、「特徴」、「手法のタイプ」、「手順」、そして「課題」がまとめられている。各研究方法の性質を順に整理した後、5つの比較として、表4.1「5つのアプローチにおける特徴の比較」(p.104-p.106) が示される (参照：表)。この表は、「研究の焦点」、「適した問いのタイプ」から、「論文の構成」まで8つの要素を簡潔にまとめたものであり、各研究方法の共通性・相違点をつかみ、調査法と自分の研究との整合性を検討していくにあたって有益である。

第5章「5つの異なる質的調査研究」では、前章において各研究方法の基本的な性質を踏まえた上で、実際に各研究方法を用いて分析された研究論文の解説を行なっている。論文は付録として、本書に全文が収録されており、第3版ではナラティブとグラウンデッド・セオリーの論文例が新たに更新された。ここでは、ケーススタディの分析事例を挙げる。ここで紹介されるものは、大学内における発砲事件を取り扱った事例論文であり、事件とそれによって副次的におこった問題を考察している。インタビューや参与観察、資料分析等あらゆる方法でデータ収集を行い、事件を多角的な視点で詳細に記述するとともに、社会心理的、組織的な課題を導いた。ここでは、ケーススタディの特徴である特殊な事例を取り上げ、複雑化された問題を明らかにする過程と、導き出される結論に同研究領域における理論構築への貢献という性格があることを示した。

このように、第4章・第5章は基礎を学んだ後に、事例をもって解説するといった実践を通じて、より深い理解を読者に与えている。著者は第5章のまとめとして、研究者が方法を選択する際、その研究方法を通じてどのような問いと結果を得ることができるか、という視点から始めることも有効な手順の1つであることを論じている。このことは最終章でも強く主張される。

(表)「5つのアプローチにおける特徴の比較」

特徴	ナラティブ	現象学	グラウンデッド・セオリー	エスノグラフィー	ケーススタディ
焦点	個人の生活を明らかにする	経験の本質を理解する	データから理論を発展させる	文化集団を記述し、解釈する	1つもしくは複数の事例をより深く記述し、分析する
適した問いのタイプ	個人経験を語る必要性がある問い	現象の本質を記述する必要性がある問い	対象者の視点の理論化を目指す問い	ある集団の文化規範を記述し、解釈するための問い	事例の深い理解を得るための問い
背景となる研究分野	人類学、心理学、社会学等	哲学、心理学、教育学	社会学	人類学、社会学	心理学、法学、政治学、医学
分析の単位	1人もしくは複数の個人	同じ経験をもつ複数の個人	多くの人の過程、行動、相互作用	同じ文化を共有している集団	1つもしくは複数のイベントや活動
データ収集	インタビューや資料	インタビューを主にして、関係する資料や観察データ	20－60人のインタビュー	観察とインタビューを主として、一定期間中に、フィールドで収集できる情報	インタビューや観察、資料など多様なデータ

【Table4.1(p.104-p.106)より一部抜粋して評者作成】

調査研究の実施

第6章から第10章は、質的調査研究に取りかかるための導入から評価までを各章ごとに示している。本書全体を通じて、各研究方法の違いに関心が向かいがちではあるものの、著者が一貫して強調するのは、質的調査研究全体および各研究方法の間にみられる共通点である。特にこの研究の実施に関する各章は、いずれの研究方法を選択しても重要となる研究倫理がまとめられている。

第6章「研究の導入と焦点」では、研究の前提となる「問題意識」・「目的」・「リサーチ・クエスチョン」について述べる。中心となるリサーチ・クエスチョンに対して、より議論を深めるための副次的な問い（サブ・クエスチョン）が、研究方法の違いによってどのように焦点化されているかを示している。第7章「データ収集」、第8章「データ分析と表現」は、データの収集法、分析法のレビューであり、第3版ではコンピュータソフトによる質的データ分析も紹介されている。第9章「執筆」で強調されるのは、質的研究における“リフレキシビリティ”の概念であり、調査を通じて調査者自身の立ち位置を見直す重要性を示している。第10章「確認と評価の基準」は、執筆後に調査者自身、対象者、読者の視点から問いに対する答えを見直す重要なプロセスを示す。

物語の転換

最終章「『物語の転換』と結論」では、本書の独自な視点である既存の事例を異なる研究方法から再構成する試みがみられる。本章では、手法から問いを導くという本来の逆手順を踏むことで、方法によって導くことが可能なリサーチ・クエスチョンの違いを実証的に示しているのである。取り上げるのは、ケーススタディの事例として分析された著者自身の論文（Asmussen & Creswell 1995）である。ここでのリサーチ・クエスチョンは、「この事件において、何が起こったか？事件の特有さとそれを理解する理論は何か？」である。著者はこの事例に対して、その他4つの各研究方法を適用した際に、明らかになると思われる異なる問いを提示している。

ここでは4つのうち、ナラティブとグラウンデッド・セオリーの再構成を紹介する。個人の人生経験に焦点をあてるナラティブアプローチでは、犯人と同じアフリカ系アメリカ人である事件に巻き込まれた教師にとって、この事件が民族的、文化的文脈にどう位置付けられたかに焦点をあてる。リサーチ・クエスチョンは、「アフリカ系アメリカ人教師の人生経験は、いかにこの事件の評価に影響を与えたか？」である。理論の構築を導くグラウンデッド・セオリーでは、事件を経験した学生たちが“超現実的”な経験として捉えるまでの過程を理論化する。リサーチ・クエスチョンは以下の通りである。「事件後、学生にとって、“超現実的”な経験となった現象を説明する理論は何か？」

著者はこの分析を通じて、研究方法が研究を形作り、問いに対する答えへの道筋を作ること強く主張している。リサーチ・クエスチョンが明確であれば、自ずと適切な研究方法は導き出すことができる。しかし、多様な問いに対する研究方法は、本当に1つに定まるものだろうか。著者は「結論」部分で以下のように述べる。

質的調査研究にあたって、私は研究者が1つの調査法を用いて研究デザインを構成することを勧めてきた。・・・(中略)・・・これは、ケーススタディの計画にグラウンデッド・セオリー分析を結びつけるといったような、手法を混合して用いることを厳格に規制するものでは決してない。“純正であること”は本書の目的ではない。しかし、読者がこれらをつなぎ合わせる前に整理・分類し、1つ1つは厳格な手続きをもって存在することを理解してもらうことを意図としている（p. 279)。

つまり、自分の研究関心およびリサーチ・クエスチョンに合った研究方法は、既存の枠だけに収まるものではないが、その1つ1つの特徴を理解し、適切な形で研究デザインと照らし合わせていくことが重要である。

本書にみる社会福祉研究に対する貢献

本書は社会福祉研究が直面する、質的研究方法論の射程となる対象や課題の検討をめぐる問題にいかなる貢献をもたらすだろうか。本書は各研究方法がどのような問いに適しているかを実証的に検討し、研究方法とリサーチ・クエスチョンの対応を示している。よって、本書は研究者が適切な研究方法を検討する際、指標の1つとなることは間違いないだろう。

さらに、本書は個人レベルの実用性を越えて、社会福祉研究の発展に貢献する。最終章において、著者が1つの事例に複数の研究方法をあてはめて実証したように、どの研究方法を選択するかによって、個別の対象や課題は多方面から考察することができる。つまり、研究方法は“対象”や“課題”に対して固定されるものではない。対象や課題と研究方法の既存の関係に捕らわれず、独自のリサーチ・クエスチョンとそれに適した研究方法を十分検討することが必要である。社会福祉研究は、現実世界を対象とし、多岐にわたる学問分野から現実の解明や理論構築を通じて、社会問題の解決を志向する（岩田ほか 2006)。社会福祉研究が共通して抱える問いは、いかに“現実”の福祉に貢献していくかであり、本書は研究方法の多様性を通じてその現実を複眼的に捉える視座を提供してくれている。

おわりに

本書は、1970年代から40年近くに渡り、質的研究を探究してきた著者による研究方法論の集大成ともいえる1冊であり、本稿で全てを語ることはできない。今回焦点を当てた、自身の研究に適した調査法を選択するという点が、評者のような研究に取りかかり始めたばかりの者に対して有効なことはもちろんであるが、既に調査法が確定し、研究が進行中の研究者にとっても、異なる角度から焦点を当てることで、1つの研究方法に縛られない新たな知見を与える良書となっている。

参照文献

[1] 岩田正美・小林良二・中谷陽明・稲葉照英編，2006,『社会福祉研究法――現実世界に迫る 14 レッスン』有斐閣 .

[2] John W. Creswell, 2002," Research design: qualitative, quantitative, and mixed methods approaches", SAGE（= 2007，操華子・森岡崇訳『研究デザイン－質的・量的・そしてミックス法』日本看護協会出版会 .）

[3] John W. Creswell, and Vicki L. Plano Clark, 2006, "Designing and conducting mixed methods research", SAGE（= 2010, 大谷順子訳『人間科学のための混合研究法－質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン』北大路書房 .）

[4] 衣笠一茂, 2003,「質的研究方法論の可能性－社会福祉の「原理」と「価値」を考えるための研究方法についての検討－」,『九州看護福祉大学紀要』5(1):107-116.